

提言書

～いわて文化支援ネットワークの活動から～

『震災から5年 被災地の文化芸術活動の今後』



目次

I はじめに	2
II 活動報告	
地域・世代・分野をつなぐ交流事業	4
文化復興に向けた課題別熟議	6
文化活動指導者の派遣	7
文化会館等の人材育成及び文化施設新設支援等	9
沿岸地域での文化支援推進員育成事業	10
文化支援フォーラムの開催	11
III 3.11文化支援フォーラム	
第1部 朗読劇「もう一人の私へ」	14
第2部 フォーラム「震災から5年、文化の役割を考える」	16
IV 現地の声	
「感謝の第九」を振り返って	24
舞台作りを通して変化したこどもたち	26
岩手の文化復興に関する提言書	29
復興と創造	32
被災地の民俗芸能を次世代に	36
V まとめ 震災5年からの文化復興への提言	40

.....
I はじめに
.....

はじめに

震災から5年。

あの日の、あの時のおぞましい出来事は、いまだに脳裏に深く刻み込まれてはいますが、時の経過とともに、記憶が薄れがちになるときもあります。文化復興支援活動を継続中でありながらと自戒の日々であります。

しかし、忘れようとしても忘れることが出来ないほどの辛苦を背負っておられる方々も少なくありません。そして、何の準備もない中、夢も希望も現世に置き去りにしたまま、突然に命を奪われてしまった人々の数の多さ。その数だけの無念が今なお漂流していることを忘れてはなりません。

文化芸術は、暮らしの中から生まれてきます。

祈りと感謝、喜びと悲しみ、出会いと別れ、怒りと安らぎ…。

演劇・音楽・美術・伝統文化・祭り芸能、表現方法は幾多にも分かれていますが、文化芸術は、その「記憶」を表現として再創造する役割を担っているのです。表現の原点は「記録」ではなく、「記憶」です。人によって、表現ジャンルによって「記憶」はさまざまに変容します。だからこそ、多様な思いをお持ちのひとり一人の心の中に浸透するのです。

5年たった今だからこそ、微力ではありますが、文化芸術は次の5年に大切な役割を担っていくことを確認しなければなりません。

風化は世の常です。時を戻すことはできません。社会基盤が整い始め、日常の暮らしがあたりまえに過ぎていけばいくほど、3.11は彼方に遠ざかります。しかし、労苦を背負い続ける人々の心と、漂流する魂の叫びは、どこに向かえばいいのでしょうか。

文化芸術は、それらの「記憶の表現」です。心の痛手から立ち直っていく姿も、忘れ去ることができない無念さも、文化芸術はそれを受容する広さと包容力を持っているのです。だからこそ暮らしの中に生き続け、コミュニティを作り出す柱の一つにもなるのです。

私たちは、この5年、文化芸術の基盤づくりに力を注いできました。この報告書は、次の5年に向けて、文化芸術の根源にある「記憶の表現」力を地域と人々の交流の実践の中で培っていくための提言書でもあります。

平成28年3月11日

特定非営利活動法人いわてアートサポートセンター
理事長 坂田 裕一

.....

II 活動報告

.....

活動報告

地域・世代・分野をつなぐ交流事業

(1) 二戸地域・宮古地域 子どもたちの合同演劇ワークショップ

会 場：ふれあいランド岩泉

日 程：平成27年8月6日（木）～8月8日（土）

参加人数：11名（小学3年～中学1年） ※二戸市7名 岩泉町3名 宮古市1名

指 導 者：小林 七緒（日本演出者協会理事）

沿岸地域・内陸地域の子どもたちが岩泉町で2泊3日の合宿をしながら、約14時間の演劇ワークショップを通して短編の作品を創り上げる合宿型ワークショップ。二戸・宮古・岩泉地域より、小学3年生から中学1年生までの11名（男子1名、女子10名）が参加した。普段から劇団で活動している子、昨年度の宮古市民文化会館における子ども音楽劇づくりに参加した子、初めてワークショップを体験する子と、様々な子どもたちが一同に会した。



(2) 『あの日から』出版記念朗読劇

① 岩泉公演「スウィング」（作：大村友貴美、演出：畠山泉）

日 時：平成27年11月11日（水） 14時～

会 場：岩泉町 小本生活改善センター

出 演：早野由紀子、山口 成明 ほか

入場者数：13名

釜石市出身の大村友貴美氏によって書かれたこの作品の舞台は、あの日から4年が経過した岩手県沿岸地区。今は東京で暮らす主人公の女性が岩手県沿岸の故郷に帰郷し、隣に住んでいた巧と10数年ぶりに偶然再会を果たす。主人公を演じたのは岩泉町在住の早野由紀子さん。また、巧や祖父、母など様々な登場人物を、岩泉町在住の方々が演じ、魅力ある舞台を創り上げた。



② 陸前高田公演「海から来た子」「風待ち岬」「お地蔵様 海へ行く」

(作：柏葉幸子、演出：坂田裕一)

日 時：平成27年12月12日（土） 14時～

会 場：陸前高田市 竹駒地区公民館 集会室

出演者：中山 恭誉、永井 志穂、星 佳奈、伊勢二郎、
菊池 大成（ピアノ演奏）

入場者数：13名



③ 大船渡公演「海から来た子」「風待ち岬」「お地蔵様 海へ行く」

(作：柏葉幸子、演出：坂田裕一)

日 時：平成27年12月13日（日） 14時～

会 場：大船渡市 福祉の里センター 視聴覚室

出演者：中山 恭誉、永井 志穂、星 佳奈、伊勢二郎、
菊池 大成（ピアノ演奏）

入場者数：29名

ある春の日菜の花畑で見つかった、ずぶ濡れの子ども。海来（みく）と名づけられた子どもと海来を家族と受け入れたあっちゃんとの日常を四季の移ろいと共に描いた「海から来た子」をはじめ、「風待ち岬」「お地蔵様 海へ行く」短編3作品を、陸前高田・大船渡それぞれで上演した。また、終了後はアフタートークを実施し、被災地の文化芸術活動の課題について話し合った。



朗読劇の出演は、盛岡の劇団赤い風の皆さんにお願いした。

④ 宮古公演「加奈子」(作：平谷美樹、演出：盛合直人)

日 時：平成28年2月7日(日) 14時～

会 場：宮古市民文化会館 中ホール

出 演 者：畑中美耶子、大塚 富夫、坂口 奈央、江幡平三郎、甲斐谷 望、米澤かおり

入 場 料：前売1000円、当日1200円

入場者数：227名

東京で暮らす被災地出身の主人公・加奈子が、自分が被災者なのかそうでないのかという間で葛藤し、故郷への想いを捨て切れず衝動的に故郷へ戻り、自分には何ができるのかを必死で模索する様子を描いた作品を、6名のアナウンサーが朗読。終演後、作者の平谷美樹さんも交えアフタートークを実施した。

被災地では入場無料の公演も多い中、宮古市にて公演を実施するにあたり有料公演での実施を試みたが、多数の来場者があり“被災地での有料公演の可能性”が広がった。



文化復興に向けた課題別熟議(朗読劇アフタートーク)

①陸前高田会場

パネリスト：柏葉 幸子(作家)

菊池 大成(ピアニスト)

菅野 修一(根岬梯子虎舞)

菅野 健一(気仙酔鼓伝)

日 時：平成27年12月12日(土) 15時～

会 場：陸前高田市 竹駒地区公民館 集会室

入場者数：13名

平成26年度に実施した「文化芸術活動に興味を持つ市民意識調査」の結果、「後継者不足」「指導者不足」「子どもの芸術文化体験」については地域を超えて多くの方々が今後の課題として挙げており、共通の問題意識であることが浮き彫りとなった。このことから、実際に被災地で文化芸術活動を行っている方をお招きし、この3課題をメインテーマとした「被災地の文化芸術活動の今後」について話し合うアフタートークを、「あの日から」出版記念朗読劇終了後に実施した。

陸前高田会場では、「これまで門外不出と
していた伝統芸能をあえて他地域で演舞し
てみたところ、それが子どもたちの目にと
まり、結果として後継者の増へつながった」
「外の景色を見ることで“もっと上手になり
たい”と思うようになる。積極的に外に出
て、よいものを感じ、持ち帰ることも大切で
ある」等のコメントがあった。



②大船渡会場

パネリスト：柏葉 幸子(作家)

菊池 大成(ピアニスト)

江刺由紀子(読書ボランティア「おはなしころりん」代表)

平山 睦子(詩人)

日 時：平成27年12月13日(日) 15時～

会 場：大船渡市 福祉の里センター 視聴覚室

入場者数：29名

大船渡会場では、「地域民話を紙芝居にする
活動の中で、紙芝居の絵は地域の中学生
や高校生に描いてもらっている。子どもた
ちにとって、この経験が“社会貢献した”と
いう自信に繋がるようだ」「たくさんの方々の
支援のおかげで立ち上がることができ
た。ここからは自分たちの力で立ち上がる
ことが大切」「特定の指導者は設けず、お互
いの作品を見聞きして共感したり講評し合ったりしている」等のコメントがあった。



文化活動指導者の派遣

(1) 宮古市「劇研麦の会」朗読劇指導

日 時：平成27年10月10日(日)～12日(月)

会 場：宮古市民文化会館

演技指導：坂田 裕一(いわてアートサポートセンター理事長/岩手県演劇協会会長)

鉢演奏指導：佐藤 桐華

宮古市で活動している老舗劇団、劇研麦の会が朗読劇「虔十公園林」の再演にあたって
鉢を使った生演奏を取り入れる事になり、演奏指導者を派遣した。(鉢の演奏とは、大き
さの違う植木鉢を並べて音階を作り、鉢の内側をマレット(バチ)で叩いて音楽を奏でる

ものである。)

また、朗読劇ならではの台詞の読み方、間の取り方など、朗読劇の演技指導を行う指導者を派遣し3日間に及ぶ稽古を行った。



(2) トヨタ・子どもとアーティストの出会い 子ども音楽劇「ゆきわたり」

日 時：平成28年3月6日（日） 15時～

会 場：宮古市民文化会館展示室内特設舞台

原 作：宮沢 賢治

脚 本：牛崎 想也

演 出：畠山 泉

作 曲：稲生 創

舞台美術：長内 努

振 付：熊谷 雄希

総合コーディネーター：坂田 裕一

音楽監督：寺崎 巖

入場者数：102名

岩手出身の作家「宮沢賢治」の童話『雪渡り』をベースに、唄とダンス・楽器の演奏を織り交ぜて現代風にアレンジしたオリジナル音楽劇「ゆきわたり」を創作。脚本・作曲・舞台美術等は盛岡市内で活動するアーティストが担当し、演技指導・演出は昨年到现在に続いて畠山泉さんが担当した。宮古市内の小学5・6年生の子どもたち7名が、発声・リズム・演技など基礎から5か月間稽古をし発表した。



文化会館等の人材育成及び文化施設新設支援等

(1) ホールレセプションист研修

①宮古会場

日 時：平成28年1月15日（金） 13時～15時
 会 場：宮古市民文化会館 大ホール
 講 師：林 理央（サントリーホールパブリシティサービス）
 参加人数：27名

②久慈会場

日 時：平成28年1月16日（土） 13時～15時
 会 場：久慈市文化会館 大ホール
 講 師：林 理央（サントリーホールパブリシティサービス）
 参加人数：22名

コンサートホールでの本格的なサービスを担うプロの接客係である「ホールレセプションист」の研修会を、実際の文化施設の大ホールを使用して実施した。沿岸地域の文化会館の職員をはじめ、内陸地域からも施設職員が参加し、ご来場のお客様への場内案内、チケットテイク、クローク業務をはじめ、コンサートホールにおける様々な接客業務を学んだ。「これまで自己流で行っていた接客業務を見直すきっかけになった」「定期的に開催して欲しい」などの声が多数あがった。



(2) ホールマネジメント・地域文化コーディネーター研修

日 時：平成28年3月4日（金） 13時30分～
 会 場：釜石市情報交流センター
 講 師：坂田 裕一（いわてアートサポートセンター理事長）
 参加人数：5名

文化会館新設中の釜石市において、「文化施設の役割とプロデュースの役割」とした研修会を行った。前半は「文化施設は今・・・」として、ホール劇場とは・近代ホールの成り立ち・公共ホールの事業の変遷・求められる職員・評価の必要性・市内の関係団体と外部

のネットワークの協力体制・震災後のホールの在り方について、後半は「“アートマネジメント”とは社会と人と文化芸術の縁結びである」として、アートマネジメントの考え方ははじめ主に制作業務の基礎「表方と裏方」「広報と宣伝」「プレスシートの作り方」「インターネットの活用」「契約の流れ」「受付業務」「記録と終演後」「プロデュースの日程」「著作権」「各種の助成」について研修を行った。



沿岸地域での文化支援推進員(地域文化コーディネーター)育成事業

「宮古地域の文化・芸術を語る会」

日 時：平成28年1月28日(木) 15時45分～

会 場：宮古市民文化会館 会議室

参加人数：9名

宮古地域を中心に活動する芸術文化団体の代表者にお集まりいただき、宮古市の芸術・文化各団体の現状と、問題点、今後の改善点について語り合った。高齢化による活動継続の問題点や指導者の不足、また指導する場の不足などの課題があげられた。

展示関連に関しては、開催場所不足の問題、開催側の新たな演出や集客力アップのための改善策の模索等、お互いの立場の問題を話し合ううちに、今後の活動についての共通の問題点が浮き彫りになる形となった。

また、宮古市民文化会館の改修での使用者側の問題点も伺う事が出来た。次回の開催へと繋げ、それぞれの団体同士の繋がりも深まる内容で、中味の濃い会議であった。



文化支援フォーラムの開催

(1) 震災ドキュメンタリー映画上映会『きょうを守る』(上映時間70分)

日 時：平成28年3月11日(金) 15時～/19時～ 2回上映

会 場：もりおか町家物語館 浜藤ホール

入 場 料：500円

入場者数：36名

東日本大震災があった2011年7月から8月にかけて、当時山梨大学在学中だった監督の菅野結花さんが故郷である陸前高田市にて撮影したドキュメンタリー映画を上映。上映終了後に斎藤純さん(作家・元もりおか復興支援センター長)・田村尚子さん(陸前高田市田村尚子ピアノ教室主宰)の対談を行った。映画監督・菅野結花さんの「ビデオメッセージ」も上映。



(2) 3.11文化復興支援フォーラム

日 時：平成28年3月12日(土) 18時30分～

会 場：もりおか町家物語館 浜藤ホール

第1部「あの日から」出版記念朗読劇公演「もう一人の私へ」

作 者：沢村 鐵

演 出：坂田 裕一

出 演：大塚 富夫

チェロ演奏：三浦 祥子

第2部 フォーラム

～震災から5年、文化の役割を考える～

パネリスト：末盛千枝子(3.11絵本プロジェクト代表)

竹内奈緒子(女優)

谷澤 栄一(釜石まちづくり(株))

伊藤 哲(宮古市教育委員会事務局)

コーディネーター：坂田 裕一

入場者数：73名

.....
Ⅲ 文化復興支援フォーラム
.....

3.11文化復興支援フォーラム

平成28年3月12日(土) 18:30~20:30 もりおか町家物語館浜藤ホール

～第1部～

「あの日から」出版記念朗読劇公演
もりおか・したまち小劇場祭2016

朗読劇「もう一人の私へ」

作 　　： 沢村 鐵

演 出： 坂田 裕一

出 演： 大塚 富夫 (IBC岩手放送)

三浦 祥子 (チェロ奏者)

3月12日土曜日の夕刻、会場の浜藤ホールは開演前に満席になった。舞台に明かりがついて語り手の大塚富夫さんとチェリストの三浦祥子さんが拍手に迎えられて登場。客席の照明が落とされるとともに、会場を包み込むように静かにチェロの演奏が始まった。物語のプロローグである。

1分程度の演奏が終わると大塚さんの朗読が始まる。

「三津人へ。元気でやっていることと思う。こうして改まって長い手紙を、メールではなく手紙をしたためることに、躊躇はあった。これは半ば備忘録。独り言だから読みたくなければ読まなくてもいい。いつか気が向いたら読んでくれればいい。例えば、何かの節目とか。3月11日とか。」という書き出しで始まるこの物語は、東日本大震災から4年後、父から東京で暮らす息子に送られた手紙形式で綴られている。語り手の大塚さんはまるで主人公の父親の姿と重なり、その声は切なくも温かく聴衆を惹きつけた。

～物語のあらすじ～

小説家である父親は、2011年3月11日の震災後、震災をテーマに書くように言われるが、フィクションをも超える激烈な事実を前に、どんな小説が意味をなすかと苦悩する。離婚して家族と別れ、自分自身の再生のために震災直前に移り住んだ故郷の釜石市鶴住居町は、津波ですべて消え失せた。特に鶴住居町の惨状はリアルに描かれる。父親は、震災から数カ月経ったとき、12歳だった息子が「行きたい」と訪ねてきたことを思い起こす。

やがて、震災の前日に遠野で一人暮らしをしていた年老いた母が脳溢血で倒れ、急きょ駆け付けただけのために津波を逃れて助かったことが明かされる。母は自らの死によって自分を津波から救った。何もなくなった町に住み続け、離れ離れになった4年間に考えたことを父は息子に語りかけながら「お前は紛れもなく、もう一人の私だ」と告げる。さらに釜石の「奇跡」と

「悲劇」を語り、被災者の安否確認の話から父と息子のDNAがつなぐ絆の深さにも触れる。最後は消滅した母校の跡でラグビーW杯の開催が決まり、鶴住居が活気づいていることを伝え、「4年後、一緒に観戦しないか。翌年は東京オリンピックに招待してくれ。お互いまだ夢半ばだ」と希望の言葉で結ばれる。

約1時間にわたる長い物語を大塚さんは一人で朗読。場面をつなぐ9シーンに三浦さんのチェロの演奏が入った。曲はすべて今回の朗読劇のために作ったオリジナル。主人公の心情をチェロの多彩な音色で表現し、物語を盛り上げた。時には悲しい廃墟のイメージで、あるいは感謝や思い出のシーンは優しく、心に染みる演奏だった。後半は決意を表すように力強く、未来を感じさせる美しい曲で朗読劇は終演した。

・公演を終えた大塚さんと三浦さんは次のように話された。

大塚 富夫「長い朗読も何度か経験あるが、ほとんどは登場人物が多いからステージに上がる人も多く、1人でこれだけの時間を読んだのは恐らく初めてかもしれません。震災に関しては、ラジオの番組で日常的にお伝えしていくことをやっており、この朗読もその延長線上にあると思っています。読むという作業ではなく自分で語る時間も幸いにあり、いろんなエピソードも伺った。語り継ぐという大げさなことではないが、忘れないうちにいろんな人に語っていきたいと思います」

三浦 祥子「演出の坂田さんから、曲はすべてオリジナルで、8小節程度、1分以内で収めることなどと難しい指令が出ました。結構大変でしたが、一般に出回っている曲ではあてはまらないものが多かったので頑張りました。嬉しいことが1つあり、大船渡で被災した私の教室の生徒さんが、仮設住宅ではずっとチェロを弾けなかったけれども、最近やっと新築工事が始まったそうです。自宅で弾けるようになるので、新築祝いにはチェロを弾きに行きたいと思っています」



～第2部～

フォーラム 震災から5年、文化の役割を考える

◆パネリスト

末盛千枝子 (3.11 絵本プロジェクトいわて代表/国際児童図書評議会名誉会員/八幡平市在住)

竹内奈緒子 (女優・劇団銅鑼/東日本大震災をきっかけに人形劇クラブを結成し、被災地へ訪問するボランティア活動をしている)

谷澤 栄一 (釜石まちづくり(株)/釜石吹奏楽団。コンサート活動のほか慰問演奏や各種イベントに参加)

伊藤 哲 (宮古市教育委員会文化課。芸術文化を担当/盛岡吹奏楽団団員)

◆コーディネーター

坂田 裕一 (特定非営利法人いわてアートサポートセンター理事長/岩手県演劇協会会長)



自分たちの姿と重なった朗読劇

坂田 まず、朗読劇『もう一人の私へ』をお聴きになった感想から伺います。

竹内 小学校のとき盛岡に住んでいたことがあり、大塚さんをテレビで見えていました。次の自分の出演のことを考えてドキドキしていましたが、鶴住居のところもスーッと入れて緊張がほぐれた。朗読劇を俳優がやると感情がいっぱいになってちょっと大きく感じるが、アナウンサーの方は淡々としていて心に染み込んでくる感じです。

末盛 すごく面白くて、幾つものいい言葉をいただきました。自分の仕事は聞き書きをしているだけだという言葉がととてもとても好きでした。父親があんなふうの手紙を書けたらいいなとも思ったし、チェロは人の話し声が一番近いと聞いたことがあります。とても

素敵なお時間でした。

谷澤 私にも息子がいて、震災当時は東京の大学院生でその頃のこと
が頭に浮かびました。僕たちは海の近くに住んでいたので生きて
いるかどうかわからなかった。普段は何の連絡もしてこない
息子が、震災の時は通信手段もない中でツイッターでいろんな
所に安否確認をして探してくれた。いつもは何にもしない息子
なのにびっくりした。手紙の中の息子は一言も言わないけれど
も、とにかくメッセージとして親のことをこんなに思っていた
んだと思い出して、涙が出そうになりました。



伊藤 5年も経ち、忘れていたこともあるが、どんどん思い出して息が詰まる感じがしました。
お母さんに生かされた自分と、離れてしまった息子への強い思いと懺悔かと思ったが、
多分父親は私と同じ年代で同じくらいの子供がおり、心に染みる話でした。三浦さんの
チェロのソロ演奏は初めて聴いた。チェロは男性の声に近く、音域がお父さんの語り掛
けのように聴こえ、体にスーッと染み込んできました。

坂田 作家の沢村鐵さんは釜石の方なそうですが、谷澤さんはご存じですか。

谷澤 地名も実名で、いろいろと現実と近く生々しいが、沢村さんが経験したことも1つで、ほ
かにもいろんな人がいろんな苦勞をしている。風化が懸念されるが、もしかしたら東京
や他地域よりも僕たちは前に進もうとしながらも、ある意味僕たちも風化しかけている
のではないか。それを改めて戻していただき、気持ちを新たにしているところです。

..... 復興に文化が果たす役割と課題

坂田 風化が進んでいるといわれている中で文化の役割は何なのか。昨年度、いわてアートサ
ポートセンターが沿岸被災地で行ったアンケート調査では幾つかの指摘があった。高齢
化、人口減少による後継者不足と、学びたくても指導者が不足していること、そして子供
の芸術文化体験が必要だということの3つです。沿岸と内陸、岩手と全国、人の交流が
必要なのではないか。私たち自身も何かを発信していく。震災から学んだこと、辛い思
い、夢をかける思いを発信していかなければならない。朗読劇を沿岸で行った時、お願
いだから全国で、岩手の内陸でもやって伝えていってほしいと言われました。震災から
5年、新しい課題が出てきたと思いますが、谷澤さん、今の釜石の悩みは何ですか。

谷澤 私は中心市街地のマネジメントをやっているまちづくり会社に勤務しています。来年
の冬頃、待望のホールができる。被災地でホールがないのは釜石だけで、大きい演奏は
体育館で、演劇はテントなどでやったり、ピアノ発表会も遠野や大槌でやっていました。
私は吹奏楽団に入ってクラリネットを担当していますが、中学校の吹奏楽の先生が我々
に生徒に教えてほしいと熱心に声を掛けてくれた。時間がある時に指導に行くと、子供
たちが喜んでくれて段々力がついてきた。先生自らアプローチしてくれ、ホールはない
けど、人間と人間との関係でちょっと意識しながら吹奏楽は動き出しています。

坂田 シープラザの広場で市民参加劇の釜石市民劇場をやるというので応援に行ったんです

が、昼にテントでやると暗くならないし、横を通る車の音がすごい(笑)。会館ができるまで待てないのと訊いたら、やれない辛さよりやるための苦労のほうが楽。だから、やりたいと。復興に文化も大きな1つの役割を持っていることを気づかされました。伊藤さんは行政の立場でもありますが、宮古の場合はどうですか。

伊藤 市の職員で芸術文化の担当ですが、私も趣味で音楽活動をしています。震災直後は被災者支援室に勤務していました。避難所ではその日を生きることで精一杯でした。そんな中、支援で真っ先に駆け付けてくれた有名人はさだまさしさんでした。仮設住宅が並ぶ校庭に来ていただき、体育館でギター1本でコンサートを開き、一緒に泣いて笑って歌った。それ以降、たくさんの支援をいただき被災者の心は徐々に前向きになっていきました。



仮設住宅の支援活動はコミュニティ形成の場として大きな役割を果たした。市内各地で復興支援のコンサートが行われるようになり、市民文化会館が休館中は公民館や体育館、お寺、三陸鉄道の列車の中でやったこともあります。震災から3年後の平成26年12月、被災したホールの中では一番乗りで市民文化会館が再建した。オープン記念事業は市民でやろうと市民団体が一堂に会して満席の市民とともに盛大にお祝いしました。新たな指定管理者のもと1年余り経過したが、以前からの悩みで、高齢化が進んで活動する人も指導者も不足していること。一方で若い世代は新たな発想で様々な活動を始めている。中には芸文協の枠組みになじまないようなものもあるが、これからは横断的に結び付ける動きも必要かなと思う。もう1つ、支援などで無料の鑑賞に住民が慣れてしまった。対価として芸術を鑑賞する以前の環境を取り戻したい。そして、最大の悩みは心の復興。震災前の芸術環境を取り戻したいので、住民が安らかな気持ちで生活できる状態に早く戻したいと思います。

坂田 市民の活動を市民自らが支えようという気持ちがないと文化はうまくいきませんね。竹内さんは東京にいて風化は感じますか。

竹内 テレビも新聞も昨日(11日)は1日中やっていたけど、何日かするとなくなる。ただ、私は首都圏の人たちも忘れられないと思う。津波の被害はなかったものの、東京も揺れた。板橋にある劇団銅鑼の稽古場も揺れて、壁が崩れた。私は埼玉の自宅に帰るのに車で普通は1時間なのに7時間もかかった。その体験があるし、津波の映像も見ているのでやっぱり忘れられない。その年の冬、関西に公演に行ったが、向こうは霧囲気がまるで違いました。その時の芝居は『ハンナのかばん』というアウシュビッツで殺されたユダヤ人の少女の話で、翌年九州で子供たちとワークショップを行ったときは、お金は役に立たないよなどと、自分が東日本大震災で体験したことを話したりして、今も継続してやっています。



震災と子供たちの未来

坂田 竹内さんは震災後、山田町の保育園で人形劇を公演しましたが、その時の印象はいかがでしたか？

竹内 山田町に行ったら、園も何もなくなって全部海が見えていました。『3匹のヤギのガラガラドン』を保育園でやった時に子供たちに応援してもらったシーンがあったんですが、役者の声が聞こえないくらい子供たちの声が大きかったことを覚えています。

末盛 子供たちは震災のことで一種のハイな状態だったのでしょうか。

私たちが絵本プロジェクトの活動で4月に宮古と山田に行きましたが、話を聞きながら男の子たちがものすごく興奮して、信じられないくらいの反応でした。新しい園舎に来るには避難所からバスでものすごい瓦礫の中を通ってくる。そのことを知って愕然としました。避難所や仮設住宅の中では静かにしていなければならない。大きな声を出していい場所ではじけたのだと思う。風化していると言ってしまうが、それはちょっと違うのではないかと思います。例えば、ケガをして傷口がぱっくり開いて血が出ている状態からその傷がふさがっていき、そしてふさがっても跡は残るが肌は光っていて、いつまでもその時の思い出は残る。人生でいろんなことに会うということはそういうことではないかと思うし、その傷がぱっくり開いたままでは生きていられないのだから、それをどう受け止めて生きていくのが大切なことです。内陸でも本当に恐い思いをしたけれど、津波に実際に遭った人たちの大変さはいかばかりか本当に想像できない。『ハンナのかばん』は第2次大戦のホロコーストの話ですが、風化しないで語り継がれている。それが文化の役割だと思えます。



坂田 末盛さんは震災のわずか10カ月前に岩手に来たばかりだったのに、もう震災直後から絵本プロジェクトいわての活動を始めました。

末盛 私の息子たちが父親を亡くしたのは6歳と8歳の時でした。その時、担任の1人の先生はお葬式にもいらしていろいろ心を尽くしてくれたけど、もう1人の先生は電話さえなかった。あの時の息子たちのことを考えると、震災で自分は生き残ったが、家族や友達を失ったという本当に恐ろしい状況を目にした子供たちを、何とかして少しでも慰めたいというか、あなたたちのことを思っているからねと言いたいことが1つと、私が長い間関わってきたIBBY(国際児童図書評議会)の組織では世界中の困難な中にある子供たちに本を届ける働きをしていますが、そこでいろんな人たちから直接の経験として空襲の中で泣きわめいて手がつけられないような状況の子供でも、膝にのせて絵本を読んでやると落ち着きを取り戻すと教えていただいた。これって本当の話だと世界中の人から聞いてきたので、そのために働きもしてきたので逃げるわけにはいかないという感じで子供たちのために絵本を集めると言い出したんです。岩手で名乗りを上げた活動だと言いたくて「いわて」と付けた。岩手で始めて10年はやろう。5年たって、最初は震災にあった子供たちを慰め、喜んでもらおうと絵本を集めてきたんですが、石井桃子さんが

「大人になってのあなたを支えるのは子供時代のあなたです」という言葉を残しておられ、我が意を得たりというか、このために私たちはこの仕事をやってきたと思います。

坂田 活動を通じて被災地の方々とも交流ができてきていますが、これから必要だと思うことは何ですか。

末盛 一番近いのは陸前高田で、絵本の読み聞かせをしている人ですが、家族をたくさん亡くされていてそれでもなお困難が襲ってきている。何も助けにならないかもしれないけど、昨日も11日だと思って電話してしばらく話をしました。友達ってそういうこと。私なりの経験もあり、例えば、息子たちが父親に死なれてすぐの時、「僕たちが寝たあとで絶対ママはパパと電話で話しているよね」と風の電話のようなことを言いあっていた。それは本当に悲しいけれど、嬉しい経験でした。そういう共有できるものが、あれほど大変ではないにしてもあると思います。絵本プロジェクトに関わっていた人で亡くなられた人も何人かいます。人が生きていくということは、こういうことだと思いながら生きています。

..... 文化芸術の復興に今、必要なこと

坂田 文化芸術は震災復興、心の復興にどんな役割を果たしていくのか。皆さん、今、必要なことは何ですか。

伊藤 大災害の発生のおと、5年目から住民の心は不安定になっていくといわれています。何もなくなった風景を毎日見ている。最近はそれも普通になってきた。以前そこに何があったのか思い出せない。こういう感じで被災地の住民の心は荒んでいくのかと思う。芸術文化は生活再建に懸命な人たちの心の復興になってきたのはそのとおりです。ハード面の整備は見えてきても、これからは住民の心の復興がとても大きなポイントでその役割は大きい。演劇、文学、音楽でも被災地の住民が思いを共有することが大切で、自ら創作活動に参加してそれを住民の前で発表して、発表者と鑑賞者が思いを共有することが大事です。震災から立ち上がろうという人々が思いを共有して共に歩いていく。芸術文化の力とは人の生きる力ではないか。生きるための栄養素、人間の五感すべてを使って鑑賞するもの。人の心を和らげて人と人を結んで人の心を豊かにしていくものであると思います。心の復興はまさにこれからが本番になっていくので、それを担っているのは文化芸術の活動だと思います。

谷澤 「共有」はすごく重要で、これまでいろんな支援を受けてきたが、それもほぼ終わり、今度はそれを自分たちでやる時期です。釜石にいる地元の間人が立ち上がって、高齢者がいたらそこに出前で自分たちで音楽や芝居を届ける。それをお年寄りが喜んでくれればそれが自分たちの喜びにもなるし、いろんなことを数多くやっているとそれが報道され、だったら私もやりたいねと子供たちや親も思って、またその子たちが自分たちでこういうことをやりたいと戻っていくためには、小さくて下手くそでも押し売りのようになっていいから、数多くどんどん自分たちが出前をしながら自分たちをアピールする時期に来ていると思います。我々の楽団でも音楽に興味がある人は受け入れて、集まってやろう

という活動を始めようとしています。

竹内 自分たちでやるってすごくいいこと。私たちは劇団であり人形劇のプロではないのでプロの人形劇団の仕事を奪うことは絶対やめよう。私たちができることは、何かを一緒にやること。お金はないけど、子供たちと一緒に何かできたらいいと思う。あと5年のうちにもしかしたら岩手でも『ハンナのかばん』を子供たちと一緒にできるかなと思います。

末盛 1つ大きな力になるのは、大変な思いをしているのは自分たちだけではない。世界中でいろんな困難に遭っている人たちがいると思うと、自分たちの置かれた場所で頑張ろうと思える。たくさん身元不明の遺骨もあり、DNAがマッチしたときに発見された状況にある。そういうことを1つ1つ胸に受け止め、いろんな人たちの悲しい思いを、想像力を持って想像していくことが大切だと思う。岩手県に悲しいけど美しい文学があるのは、何回も津波に襲われたことに関係あるのではないか。その悲しみの記憶を大切に生きている人たちなのではないか。その分、珍しいほどに豊かな人たちの集まりではないかと思っています。

坂田 ジャーナリストの外岡秀俊さんは、阪神淡路大震災でも家屋が倒壊したり、たくさんの方が亡くなっているが、それは家族の目の前で起こったことで、行方不明者はほとんどいなかった。でも、東日本大震災は心の準備も何もなく突然にしかも家族別々の場所で別れを余儀なくされた、阪神淡路大震災との大きな違いを話しています。風の電話が大槌にあり、聴こえないかもしれないけど受話器を取って語り掛ける。それも別れをきちんとしていない無念さの表れかもしれません。そういう時に文化芸術がそれに代わる何かを作っていく役割、クリエイティブの役割もある。心の癒しもそうだし、最初、文化芸術は心を和らげてくれる感じがあったが、5年たってますます重要になってくるのではないかと思います。



伊藤 宮古では今もたくさん復興支援公演をいただいております、これについては無料という方針で、一方で悩ましいですが、一般の公演は徐々に取り戻していきたいと思っています。

坂田 文化芸術の役割は、心の復興、コミュニティの再生に今後ますます強くなっていく。震災直後にいわき市のホール・アリオスは「アリオスは変わらない」というメッセージを出した。避難所になっていて公演はできなかった。けれども「変わらない」と。ホールは文化芸術の発表の場であるけれども地域の文化芸術を創る場でもあると、地域に出前公演を震災前からたくさん行っていた。だからこそ、「アリオスは変わらない」と、市内のいろんな所にアーティストを派遣して公演をした。文化芸術は変わらない。場所も必要だが、やる気持ちとそれを支える人たちに届けることも必要ではないかと思っています。パネリストの皆さん、今日はどうもありがとうございました。

<会場からの意見・質問>

- 沿岸は高齢化が進み、イコール年金生活である。有料もいいが、無料の映画も提供してほしい。例えば『二十四の瞳』のような、心に染みる映画もいいのではないか。1日限りではなく、継続して見られるような場所を作ってほしい。
- 岩手出身だが関東から来た。風化が進む中で、5年前から今も寄付の仕方がわからない。しなかったと苦しんでいる人もいる。その力を吸い上げることはできないか。
- 一関から参加。初めて沿岸に行った時の衝撃は強かった。以降、仕事で何回か行っても衝撃は大きかった。今月11日、大船渡でコンサートがあって各地から仲間たちが集まってきた。そういう人たちは沿岸には向かうが、もう少し内陸でも何か所かイベントとかあったときに体験していない人を沿岸に連れて行って、当事者ではないが後から見た目とか衝撃だったことをその人たちに伝えたり、仕事で行ってご飯を食べるときに食堂も固定化しているが、そうするといつも来てくれるねと笑顔になってくれることもあるので、もし沿岸に足を運ぶことがあったら飲食関係でも常連化することも大事だと思う。

.....

IV 現地の声

.....

「感謝の第九」を振り返って

宮古市民文化会館芸術監督 寺崎 巖

「感謝の第九」実行委員長 川原田 隆 司

震災直後に立ち上げたいわて文化支援ネットワークでは、宮古市を中心とした楽器支援や、復興予算に圧迫されてできなくなった鑑賞事業の代行などを中心に多大な支援を行ってきた。その後、物質的支援からフェーズが変わり、立ち上がる市民へのサポートが中心に移行した。その中で待ち望まれた市民文化会館の再オープンが画期的出来事であった。堰を切ったように多くの活動が再開される中、多くの問題は残されたまま。震災による長期間の活動制限、それに伴う人的流出、市民活動団体の高齢化、慢性的指導者不足、後継者難等々。震災の影響のみならず、地方都市の少子化や過疎化の大きな流れはその困難さに拍車をかけている状況。実際市民参加企画を企画しても、学校など人数目途が確実な場合は問題ないが、徐々に規模縮小してきた一般団体などは、見通しが立たない不安が腰を重くしているのが現実。今回の第九でも、当初は30人から40人集まれば立派なものという予想で、外部からの応援を前提として企画したが、実際は100名を超える応募があり、練習も大変盛況なものであった。慢性的指導者不足という意見に着目し、支援のポイントを絞って企画したことが、成功へと導く鍵だったと言える。ウィーン・フィル&サントリー復興祈念賞の補助は、一流合唱指導者を十数回に渡り招聘するという市民にとっては素晴らしいプレゼントとなった。今後は、支援団体や文化会館・教育委員会などが、ニーズを的確に捉え、市民の要望に応えたり、進むべき方向を示していく作業が必要である。

感謝の第九の実行委員長を務めていただいた川原田隆司さんに感想を書いていただいた。川原田さんは、宮古市では老舗といえる合唱団『木曜会』の団長で、長期に渡り宮古の音楽文化を見つめてきた方でもある。

(寺崎巖 記)



平成28年2月13日、今まで震災復興のために御支援いただいた方々への感謝を込めて、「感謝の第九」と銘打ったベートーヴェン第9交響曲演奏会が、復旧間もない宮古市民文化会館大ホールに、実に25年ぶりに響き渡りました。会場の皆さんから送られた熱い拍手に、ソリスト、オーケストラ、コーラスのすべての出演者が感激いたしました。合唱部門の練習に携わった実行委員の一人として、今回の演奏会を振り返りながら、この感動の源を探ってみたいと存じます。

第一に、曲目がベートーヴェンの第九だったということです。世間ではクラシック音楽は敷居が高いと言われておりますが、この「第九」は別格で、日頃演歌や歌謡曲を歌っている人達にも知られており、一生に一度は歌ってみたいと憧れるものが、明治以来の日本文化の中で培われてきたのだと思います。演奏会の5か月前、合唱団員の募集をした時、私はせいぜい30～40人くらいしか集まらないのではないかと懸念しましたが、嬉しい事に110人もの方々が応募してくださいました。これが他の曲だったら、このように幅広い年齢層が多く集まることは無かったことでしょう。

成功の第二は、素晴らしい指導者に恵まれたということです。御多忙の中、深く、含蓄のある特別レッスンをしてくださった岩手大学教育学部教授、佐々木正利先生、そして十数回のレッスンを楽しく、且つ情熱を込め、指導の中心的役割を果たしてくださった小原一穂先生に篤く感謝申し上げます。一般に市民参加型の合唱演奏会は、練習回数、及び、毎回の練習に参加する人数が少なかったりして、せいぜい音取り程度で終わってしまう事が少なからず見受けられるのですが、今回は違っておりました。先生方の、より高いものを求めようとする心を育む指導に一同感動し、参加者の顔はベートーヴェンの音楽に浸る喜びに満ちておりました。毎回のレッスン参加人数が60～70名以上を保っていたことも、如何に参加者が毎回のレッスンを心待ちにしたかを物語っております。私ども実行委員も、この素晴らしいレッスンを聞き逃すまいと楽譜に沢山メモを書き込み、それを整理して十数ページの小冊子にまとめ『『感謝の第九』演奏心得』として参加者全員に配りました。指導者の指示に沿って、全員一致した音楽表現を行おうと強く望んだが故のアイデアです。

人はみな、向上することを喜びとして生きるものです。そして、普段の生活は通俗的なものであったとしても、心のどこかで高貴なもの、美しいものにあこがれており、それに巡り会った瞬間を至福のひとつときと感じます。今回参加者は、その「ひとつとき」を得ることができました。

今回の催し物は、復興支援の一つのアプローチとして成功したと思います。その理由として、上記二点を挙げさせていただきました。

最後に、陰で支えてくださったスタッフの方々、実力と情熱を兼ね備えた4人のソリスト、いわてフィルハーモニーの皆様、そして、このような感動的なステージを実現してくださった指揮者の寺崎巖先生に深く感謝し、拙文を結びたいと存じます。 (川原田隆司 記)

舞台作りを通して変化したこどもたち

島山 泉

去年度に引き続き、「トヨタ・子どもとアーティストの出会い 子ども音楽劇」の指導・演出を担当して、こどもたちの計り知れない才能と、その才能と意欲をのばす機会の少なさを私は実感しました。

私は、平成26年度から宮古市民文化会館で上演することも音楽劇の演技指導及び演出をしています。

1単位3時間、およそ15回の稽古で、舞台の上で表現ができる体作りから、30分ほどの舞台の上演までをひとつの取り組みとしているもので、昨年度は宮古市近郊を対象に13名が、今年度は7名が参加しました。

●平成27年度の活動(稽古内容)について●

昨年度の参加者が今年度も参加したので、顔なじみということで初回から体づくりや発声練習、呼吸法などの指導をしました。

演劇・音楽・舞踊と大きく3つにわけ、その部門で重視すべきこと・こどもたち自身で考えてほしいこと、達成して欲しいことを伝え続けました。

例えば演劇では、「台詞を覚え、大きな声で台詞をいう」のではなく、その台詞や役が置かれている状況によって、台詞をいう心理状態が違うこと、役の心理状態によって発せられる台詞の大きさや速度が変わることを、ワークショップを通して伝えました。

音楽では、体を楽器と説明し、その楽器が気持ちよく響くための姿勢や、メロディーや楽譜にはどんな意味が含まれているのか、その意味を伝えるにはどうすればいいのか、会話をしたり、実際に声を出したりすることで、一緒に考えました。

舞踊では、音楽のリズムに合わせて体を動かし、動く、止まるという動作だけでもバリエーションがあることや、一人、二人、複数といった踊る人数や体の動かし方によってお客さんに与えるイメージに違いがあることをグループごとの発表で、「踊り手」「観客」の二つの立場を体験することで感じてもらいました。

また、3つの部門に共通して、楽しんで表現することはもちろん、舞台上にいる以上、表現をする者としてできることが沢山あることをこどもたちは学びました。



●稽古を重ね、こどもたちの成長が見えた●

稽古を通して、こどもたちに様々な変化が見られました。顕著だったのは、稽古に臨む姿勢

です。

最初、芝居の稽古では台詞や動きに関して「こうすればいいですか?」という質問が多かったのですが、稽古を重ねるにつれ「こうしてみたいです」「今、このように動いてみたんだけどどうかな?」「この台詞ってこういう気持ちなのかな?」と、自分たちが脚本を読んで感じたこと、やってみることを積極的に持ち込むようになりました。台詞がない役が舞台上に立つことは大人の役者でも難しいことですが、こどもたちは、他の役の台詞を聞き、感じ、その空間を演じるようになり、同じ役者としてもこの成長には驚いています。

舞踊や音楽で特にこどもたちが楽しそうに取り組んでいたのが、全員が協力して一つの音楽や空間をつくりあげることです。

舞踊では、一人から二人に増え、全員が関わりお互いの動きを見ながら動くことで全体の空気感を感じ取り、ともに表現しました。音楽では、和音をパートごとに分かれ歌い、きれいなハーモニーを生み出すことができると拍手が起きました。

また、刺激になったのが私以外の表現者との出会いです。今年度は岩泉町出身・在住のブレイクダンサー 熊谷雄希さんの指導のもと、およそ2時間、ダンスの基本を学びました。



初めてみるブレイクダンスに驚きを隠せず啞然とするこどもや思わず歓声をあげるこどもがいました。練習では出来ないステップに根気よく続け、できるようになり、こどもたちは自分達の可能性を自分達で決められないこと、また他の人と交流することで可能性が広がることを知りました。

他にも、表現したいことを発表しあうことで、一人一人の考え方やキャラクターを自然と知ることができ、一つの舞台をつくるチームとして雰囲気も非常によくなり、また、回を重ねるにつれ、表情も豊かになってきました。

これらのことは、舞台作りだけでなく、社会生活でも重要な要素と私は考えます。

●私の指導以外の選択肢が限られているという現状●

たった15回ほどの稽古で、こどもたちは多くのことを吸収し、吸収したことを自分の技術として応用することができました。芸術に触れることでこどもたちの感性が磨かれ、また地域の友達と交流することもできるようになりました。

芸術に触れる機会がこどもの心の成長にとっても重要であることが分かります。

にも関わらず、こどもたちとの会話には、芸術文化に触れた体験がありませんでした。

宮古市をはじめ沿岸地区は、舞台などの芸術作品を鑑賞したり、自ら作ったりする機会が極端に少ないです。



「この土地に、芸術に触れる機会がないから」と故郷を離れ、活動をしている方々をよく目にします。もしこの土地に芸術があったなら大好きな故郷に住み続けたいと思う表現者が思う存分に芸術活動ができる地域が増えてほしいです。多様な表現活動の団体が増え、一人一人が好む団体や指導者と作り上げるのが当たり前であってほしいです。

芸術活動が盛んになることは、生活の豊かさに繋がります。その豊かさが子どもたちを育てるうえで必要なことですし、子どもたちが将来、故郷を誇りに思う理由にもなるのではないのでしょうか。

岩手の文化振興に関する提言 (演劇に関する指導者不足について)

沿岸北部担当文化支援コーディネーター/日本演出者協会・日本劇作家協会所属

こむろ こうじ

(1) 全国と岩手県内の現状

一昔前までは演劇はとても身近なもので、地域の人々の間では公共ホールで有名人が演じるのを観るものという発想より、身近な人たちが演じ、それを楽しむという感覚が強かった。

かつては、日本全国の各地域には青年会が有り、その青年会が民話等をモチーフにした舞台を作り上げて地元の方々に提供するという形が一般的であった。岩手県内でも同様、青年会演劇が盛んで、地元での公演だけではなく、全国大会へ出場して、地元で作上げた舞台を全国に発信するというのも珍しいものでは無かった。

この地元で舞台を作り上げるという想いは、現在各市町村民劇場に受け継がれ、各地域に定着しているともいえる。

ただし、全ての市町村でこういった市町村民劇場の活動が展開されているかといえば、そうではなく、ホールを有し指導者が居る地域に限定された取り組みとなっている。

劇団活動においても同様で、長期的に維持可能な活動が展開できているのはほぼ盛岡地域だけに限定されている。

(2) 被災沿岸部の現状

特に、岩手沿岸地域では、舞台を作り上げ発表するという演劇文化がなかなか定着していない。これは、被災したことに関係するものではなく、地域の風土として、演劇より、釜石地域の『虎舞』や普代村の『鶴鳥神楽』等に代表される伝統芸能の『舞い』等が、文化活動として定着しているからといえる。

現在、沿岸部で演劇活動を展開しているのは、ホールの再建を待たずにテント芝居として活動を再開して3年目となる釜石市民劇場(いわて手づくり舞台協議会所属)、NPO等の支援を受けながら震災後も精力的な活動を展開している宮古の劇研『麦の会』(岩手県演劇協会所属)、昨年度旗揚げした釜石の劇団もしよこむ、久慈市民おらほーる劇場がある。

(また、今回大槌でも町民劇場が旗揚げされた。)

内陸部の演劇活動の状況から考えると決して多い数の団体が活動しているとはいえない。しかし、それぞれの団体が工夫を凝らして活動を維持展開している。



テントで公演をしている釜石市民劇場

(3) 指導者不足の解消についての提言

そもそも、指導者の資格等を有する必要の無い演劇界で、指導者と受け手側という括りをしてしまう発想がなじむものではない。関わっている人間が指導側にも立つようになるという仕組み、あるいは、外部の人材が定期的に地方劇団に関わることができる仕組みが、確立されなければ、演劇活動が、地域に定着し継続的な活動として維持することは不可能である。

実際、東京等から講師を招聘して単発的なワークショップを開催したところで、そのワークショップで得た知識や育成された人材を日常的な活動につなげることができる組織や、コーディネーターが存在しなければ、文化振興の施策は機能するものではない。

行政主導で事業を行っても、人材が育たず自立した組織体系をもった文化団体が育たにくいのはそのような側面があるからである。

では、どのような活動が文化振興につながる可能性があるのか、実践例から考察していきたいと思う。

(4) 実践例

① 文化会館から発信する新しい試み (NPOからの発信)

宮古市民文化会館では、いわてアートサポートセンターが指定管理になったことにより、従来の単発的な公演事業だけでなく、子どもたちのミュージカル体験ワークショップに取り組んでいる。

これは、地域に密着し、日常的に指導が可能な講師として地元FMに勤務する元劇団わらび座の俳優(畠山泉)を起用するなど、子どもとのふれあいと、長期的活動を展開することができることを大事にして事業展開をしている。このような事業は、10年ス



H27年3月上演 どんぐりと山猫より

パンで継続することによって、舞台上に立った子どもたちが指導者として、次の世代の育成に携わることが可能となって来る。平成28年3月には2年目の第2回目の公演を行った。

② 人材の地域定住

久慈では、昨年、東京の劇団『希望舞台』の公演があったが、その時の出演者である藤織ジュン(23歳)が公演終了後に、地域振興のため久慈に定住したという実例もある。

現在、久慈市の非常勤職員として勤務しながら、久慈市のPR活動に取り組んでいる彼女であるが、専門的な舞台経験のある人材が地域に定住してもらうに至ったことは、文化振興面から見ても大きな成果である。更に地域で指導者として育み地域の文化振興に寄与してもらえる活動の展開が望まれる。

③ 釜石発、劇団もしよこむの展開 (個人の発信と、新たなネットワークの在り方)

平成27年3月に釜石で『劇団もしよこむ』が、旗揚げした。彼ら彼女たちの持ち味は、移動公演が可能な舞台(簡易的なセットと、家庭用コンセントからの電源確保が可能なLED照明の保持、二人芝居というコンセプト)により、この一年で釜石・雫石・遠野と移動公演をこなし、1周年の平成28年3月には、東京公演を行った。

このユニットの最大の利点は動きやすいコンパクトな組織体系をつくったことはもちろんではあるが、フェイスブック等を使って、日本各地の専門的な知識を持っている人材とつながって、適時指導助言を受けることができるシステムを構築したことが挙げられる。

これにより、今までは数年かかっていた、地方の新進団体の盛岡公演や東京公演が最速の状態でも可能となった。

指導者を育成するためには長い時間がかかるし、講師を招聘するには謝金・交通費と大きな予算がかかり若手の団体では不可能だったことが、インターネットの効果的活用により、可能になっている。

インターネットを活用し、団体の指導育成の助言を現地に赴かなくても実施できるシステムの構築により、地方で埋もれてしまう才能を育成できる可能性を示す、先進的な事例ではないかと思われる。



劇団もしよこむ『平行螺旋』より

(5) 今後の展望

岩手県は広い地域であり、独自の文化がそれぞれの地で育まれている。それぞれの地の文化の良さを生かしながら、それを維持発展させるための助言が得られるシステムを構築することにより、有能な才能が今以上に開花される可能性がある。

文化活動に携わる多くの方とのコミュニケーションを図り、それをつなぎ合わせることによって、活動の縮小、指導者不足は解消していくものと思われる。

その役割を果たすのが文化支援コーディネーターであることを十分に理解し、更に岩手県の文化振興に寄与すべく、コーディネーターとしての活動を継続していくべきであると決意を新たにするものである。

復興と創造

コバヤシ ケンチ子

東日本大震災から5年経とうとしている。私が生まれ育った場所は岩手県宮古市田老である。津波後の荒廃した町の姿はまだ記憶に新しい。その半面、津波以前の町の様子の記憶は少しずつ消えている気がする。震災後に生れた子供達は今の状態が町の姿だと思っているだろう。

これから徐々に町が造られ、以前あった日常が形を変え、新たな町として日常を取り戻そうとしている。昔の様子を思い出しながら懐かしもうと記憶を辿る自分があるが、新たな町がどのような日常風景をつくり出していくのかという部分にも興味をもつ。

田老という町は記録としては明治29年、昭和8年、平成23年と津波被害を受けてきた。そのたびに多くの命が奪われてきた過去がある。その為大きな堤防(防潮堤)を町に造り津波の被害を防ごうとした町である。

津波を防ぐために造られた堤防は、とても長い年月を経て、東日本大震災の時に検証がなされた。結果として被害から免れず荒廃した状況となった。

防潮堤が出来る以前、昭和8年の津波石碑が田老小学校の裏手、田の沢地区にある。防潮堤が造られていない時の記念碑で津波が来た際、どのように逃げるかが刻まれている。

自然の驚異に対する防備を後世に伝える為の石碑である。

私はこの石碑の存在を津波後に知る事になる。石碑があった事は知っていたがその内容までは知らなかった。私の周辺の人達もその様な石碑があったような気がするくらいの記憶しかないと話す。その石碑の存在は防潮堤の出現により後世に伝えられない石碑となった為だろう。

人間の造りだした防潮堤を信頼し信用しその存在は永遠であるかのような錯覚があった事により東日本大震災の際に、また尊い人命を落とす結果となったと感じている。

私自身も防潮堤があるから津波被害は最小と思っていたが、その結果は全く違うものであった。何万年とかけて出来上がった地形に対して人間の造りだす構造物は完璧ではなく時にはメンテナンスが必要だったり、そもそもの考え方を変えたりしながら、作りだされ変化していくものである。人間の造った構造物というものは、長い年月をかけて勝手に形つくられた自然には勝てないのである。その自然に打ち勝とうとする人の試みは興味でしかないのかも知れないと感じる今日この頃である。

私は津波に畏怖を感じながらも自然に対して敬意を持っている。先人達も自然に対しての敬意があったからこそ津波石碑を建て後世に伝えようとしたのだろう。



「津波石碑」

表面

- 一 大地震の後には津波が来る
- 一 地震があったらここへ来て一時間我慢せ
- 一 津波に襲われたら何処でも此れ位に高所へ逃げろ
- 一 遠くへ逃げては津波に追いつかれる常に近くの高い所を用意して置け

裏面

昭和8年3月3日午前2時30分上下に動揺する強震あり
 続いて3時10分頃より大音響と共に大津波の襲来あり
 午後3時28分頃 被害最も多し 本村の流出戸数505
 戸 溺死者911名 負傷者122名 損害見積もり額
 金 2928755円 本碑は東京朝日新聞社読者より寄託
 されたる義捐金を同社に於いて罹災各町村に分配し残余
 を更に本碑建設費として寄贈されたる金員をあて建設し
 たものである。

昭和9年3月 下閉伊郡田老 村長 関口 松太郎 誌
 と刻まれている。

津波に関する文章を書くと、津波以前の田老の姿を思い浮かべる。小さい町であったが小さいながらもその世界が全てで、幼い時はその小さい町空間が全世界だと思っていた自分を思い出す。時間と共に町の姿は少しずつ変わっていったが大きな変化はなく、ゆっくりと時間が流れるような空間がそこにはあった。陸の孤島と言われていた時もあったくらいなので、その時間の進み方はとてもものんびりしていると考えてもらってよい。

そんな空間で育った自分もまたのんびりしているである。

この、のんびり空間で災害が起り、今現在急ピッチで町が造られている。この急ぎ足は津波襲来よりも想定外の急ぎ足なのではないかと感じている。住む場所に関しては急ぐ必要性を感じるが、その他の町づくりに関する方向性まで急ぎ足となっている感じを受ける。

復興し町づくりを行っていくという事はとても時間のかかるものと思う。少子高齢化や人口の流出など様々な問題もあるとは思いますが、自然災害の予測不可能な動きと共生していくには柔軟な町づくりの創造がとても重要な要素となると感じる。ましてや、田老は3度津波に遭っている。その度に、先人たちはどう感じていたのだろうか。

今現在、田老の町があった場所に突如として球場ができています。国道脇に建設され、ほぼ出来上がっている。どのような経緯でこの球場が建設されたかは分からないが、震災前球場があったので、それを国道脇に造ったものと思う。少しこの球場に関して苦言を呈するならば、球場は球場としての価値しかなく、その他に置き換える事のできない柔軟性に欠けるものである。自然自体がとても柔軟性に富み、なるように変化していくのに対して、人が創造するもので、時としてその創造物を限定的に扱おうとする構造物がある。その限定的な使用目的の構造物が今、出来上がろうとしている。

復興ではなく復旧であるという言葉をよく周りから聞く、復興というものは独自の文化を再

発見しながら新たなアプローチをして、よりよい町を造りだすものと私は考えているが、そうはなっていない。とても保守的な考えで以前在ったものを違う場所に移すだけなら確かに復旧とって良いのかもしれない。私の知っているのんびりとした田老の独自性はというものはこの復旧にはないと思っている。

少し美術の話と交えながら話したい。美術とは美の術と書いて美術である。私自身は洋画を学んできた。美術の考え方を、制作を通して学んできた。美術は自由であるといった風潮があるが美術の根っこ部分にはしっかりとした基礎、歴史がある。その事を知らない人が、そのうわべだけを見て自由であるといっていると思うのだが、美術は美の術であるから自由ではないのである。ただ自由になろうと葛藤しているのは確かである。美術自体が自由であるならば世の中にある全ての制作物は美術作品とっていい筈であるが、そうはなっていない。では何が違うのかと言われると、自身で制作しながら過去の作家達が何を体現してきたのかを、肌で感じるしかないと思っている。それが遠回りではあるが、もっとも近道である。

この美術というものは常に歴史を背負いながら自由になろうと葛藤している。または葛藤させている。その為、様々な柔軟性に富んだ変化をしながら進んでいる。これは時代と共に柔軟に変化、変容しながら様々な顔を見せてくれる。とても自然に近い流れを持っている。

私が自然に敬意を表するのは、美術と自然が似ている感じを受けるからである。

美術は人が創り出す自然であり、自然は自然と勝手に創り出す。

美術作品とは別に、日常空間の中で人間が創り出した物も時間を経る事により自然へと置き換わっていく事がある。自然に近ければ近いほどその物たちは美しいと感じる事がある。反対に不自然である事も美しいと感じる事もある為、なかなかどうして人間は簡単な生き物ではない事も知っている。

限定的な構造物も、いつかは見慣れて風景となり美しいと思う事もある。田老でいえば防潮堤がそれにあたるのではないかと思う。先人達が必死で考え、津波から町を守ろうとした結果の産物が防潮堤であり、その考え方自体がとてもピュアに「町を守りたい」という自然な考えで造られている。結果としては「守れない」ものではあったが、守ろうとした行為そのものが美しい事と感じる。津波に幾度もあった為か、町には古い構造物がない。今後、町に残る最も古い構造物が防潮堤となっていくと思う。その美しさは他の所にはない独特な美しさとなって行く事だろう。

自然の摂理に身を寄せながら、ゆっくりと復興を創造できないだろうかと思う。自然現象によって壊された町ならば、そこで生きていく為に自然と調和した生き方を本気で考えていっても良いと思う。いつでも、どんな状態でも修復可能な町づくりができ、新たな価値観を自分達で生み出せる町であって欲しいと思う。様々な考えが交錯する中で町を形成する為には、一つの核となる考え方を示すだけで良いのかもしれない。先人が石碑に刻んだように、津波の際にはこの場所より高い所に居ろというのは、高い場所なら安全であるという事だ、津波に対しての防備を後世に知らせている。

今度は私達が津波後に「どのように町づくりを行ったか」、「どのような考え方を持った方が良いのか」という事を後世に伝えていく使命があると思う。なるようになって来たでは何の参

考にもならない。ゆっくりで良い、のんびりしながら自然と調和する町を造ってあげればと願っている。



※1 「防潮堤」地元では防浪堤と呼ぶ



※2 津波で壊された防浪堤、奥まで防浪堤は続いていました

最後になるが少し宣伝をしたい。今年度より美術教室を宮古市に作ろうとしている。

まだ、できていない為、宣伝にならないのだが屋号として「kenzico ラボ」もしくは「kenzi コラボ」とする予定である。今現在、部屋のリノベーションを自身で行っており3月にオープン予定であったが、4月になりそうな進み具合である。

大工仕事に慣れてない事もありとてもスローペース、、、、、、

生徒さん来るかなと不安要素満載だが、生徒が来る事を期待し、新たな創造の場が宮古につくれたらと思っている。



※1 2012年盛岡市中央公民館にて行われた「つながる」アートコミュニケーション展での作品制作風景
この作品は水の力を借りて作品を制作している。アルミ板に顔料、そして水で完成する作品。
作品タイトル「ground」

被災地の民俗芸能を次世代に

大船渡市郷土芸能協会 副会長・浦浜念仏剣舞/金津流浦浜獅子躍 代表 古水 力

あの恐るべき東日本大震災から早や5年。いや、まだ5年……。人それぞれに思いが異なる。散在していた瓦礫の山がきれいに片づけられ大災害がなかったかに見えるが、高々と築かれた防潮堤、大量の土砂の山や行き交う工事車両をみると異様な感じすらしてならない。さらに、浸水区域内に新しい公営住宅や一戸建ての民家が建てられている光景を見ると、高台移転の方針に沿わない矛盾を感じたりもする。

それはさておき、この5年という歳月を振り返ると正に、苦闘の5年であった。

何より先に民俗芸能の活動をどう再開させるか、流失した道具、衣装の問題、稽古と保管場所の問題、報道関係者の切れ目ない取材攻勢、県内外からの出演要請、助成事業の情報収集と折衝、見積依頼・助成申請・発注・納品確認・実績報告書と一連の作業が繰り返され、未だ、終結に至らない。

■大震災の被害

私が所属している民俗芸能は、「浦浜念仏剣舞」と「金津流浦浜獅子躍」である。

浦浜念仏剣舞は、江戸中期に始められたという鎮魂芸能だが中断と復活を繰り返してきた。昭和47年7月、10年ぶりに復活させてからは「中断を許すな」を合言葉に継続させてきた。また、念仏剣舞の復活組が中心となって、大正後半に途絶えた浦浜鹿踊の掘起こしにも取り組んだ。

平成2年6月、江刺市(現奥州市江刺区)金津流梁川獅子躍に入門。梁川での稽古を重ね、平成21年11月、伝授式と獅子躍供養碑建立除幕式を行い「金津流浦浜獅子躍」として新生復活させた貴重な文化遺産である。

大災害をもたらした大津波。剣舞と獅子躍両保存会員中、自宅や店舗等全壊したのが9人であったが家族を含め全員無事であった。ただ、両保存会の合同詰所としていた建物が全壊し、保管していた装束・道具を流失した。獅子躍は、太鼓3個と小物類の一部に止まったが、剣舞は全てを失った。

1年そしてまた1年と無理なく根気強く継続することを目標にしてきたが、大震災の衝撃はあまりに大きく、「今年のお盆は中断せざるを得ない、再起不能……」と思える日々が続いていた。

大震災から1か月後、以前から交流のあった民族歌舞団荒馬座から支援の声が届き大きな励みとなった。

鎮魂の芸能が失われた訳ではない。犠牲者の冥福を祈りつつ悲劇を共有し、元気づけるのが我々の役目だと気を取り戻した。そして、6月18日、浦浜念仏剣舞、金津流浦浜獅子躍合同して瓦礫の中を行進し、100か日供養を行い、活動を再開することができた。

■民俗芸能の復旧、復興を目指し

大船渡市郷土芸能協会は、加盟団体の被災状況を取り纏め、「日本財団・まつり応援基金」に一括申請、助成決定をうけ被災団体の支援事業に取り組んだ。

平成 25 年度には、文化庁文化芸術振興費補助金（文化遺産を、活かした地域活性化事業）を活用して新たな事業を展開、継続中である。

事業の内容は、情報発信、普及啓発、記録作成の事業を計画し、①大船渡市の民俗芸能を発信するホームページの作成委託、②大船渡市の民俗芸能を紹介するパンフレットの作成、③虎舞競演会の開催、④大船渡市民俗芸能映像記録の保存、⑤大船渡市民俗芸能調査・報告書作成、⑥公開フォーラムの開催など 6 項目を重点に進めている。

平成 27 年度は、気仙の芸能 19 団体の参加協力による「黄金けせん！民俗芸能大祭」をさかり中央通り商店街の路上で開催。また、継承事業を新たに加え、後継者育成で 3 団体（赤澤鎧剣舞、白浜剣舞、前田鹿踊り）、用具修理・新調で 3 団体（崎浜念仏剣舞、前田鹿踊り、白浜剣舞）の装束整備をバックアップした。

さらには、平成 26～27 年度アサヒグループ・コミュニティ助成事業で、浦浜民俗芸能伝承館建設委員会、門中組虎舞、川原鎧剣舞、小通鹿踊り、根白虎舞、白浜剣舞を市芸能協会として推薦、それぞれが直面している整備事業に支援をうけることができた。

前記とは別に私的な活動として、浦浜念仏剣舞、金津流浦浜獅子躍の整備、助成金の確保とともに、地域の枠を超え被災団体の救済に奔走してきた。

大石七夕組（陸前高田）、両替虎舞（同）、脇之沢獅子舞（同）、新田虎舞（同）、三日市虎舞（同）、広田御祝い（同）、明土権現舞（大船渡）、泊権現舞（同）、浦浜仲区権現舞（同）、越喜来小学校（同）、小河原虎舞（同）、仰山流笹崎鹿踊り（同）の流失した衣装・道具等備品整備をサポート。要望の 100% までには至らないが 80～90% は確保できたと思う。

こうして、大震災後における被災団体の衣装・道具等備品整備は着実な前進をみたものの、「借用していた仮設のコンテナを回収され、装束を会員個々に分散して保管中（笹崎鹿踊り）」
「ヒノキの山車を造ったが保管場所がない（小河原虎舞）」
「保管場所がなく市役所に要望しているがプレハブ倉庫も手に入らず困っている（広田御祝い）」
「保管庫のめどが立たないため、建設会社の会議室を借り保管中（脇之沢獅子舞）」

等等、せっかく整えてもらった大事な備品の保管場所、伝承していくための活動拠点施設を確保できず、施設整備が今後の大きな課題となっている。

■拠点施設「浦浜民俗芸能伝承館」の実現

民俗芸能の保存継承の重要性がいたるところで話題となり強調されるのだが、そのための拠点施設整備に対する支援事業がない。道具・装束整備開始後、保管場所の確保について訴え市役所はじめ交渉に駆けずり回ったが実現せず、中古の大型ウイングコンテナを購入して対応することになった。それだけでは問題の解決にはならないので、平成 25 年 7 月、浦浜民俗芸能伝承館建設委員会を立ち上げ、さらに、建設予定地周辺の住民に呼びかけ自治会を結成し、コミュニティセンター助成事業として申請。不足財源 1 千万円の全国募金を達成（民間団体 100 件、個

人400名)し、平成27年3月、待望の「大江田河内コミュニティセンター・浦浜民俗芸能伝承館(木造平屋建て182.18㎡)」を実現することができた。

■伝承の課題

祖先伝来の民俗芸能を守り次世代に繋ぐ作業は、一見、簡単に見えるが過疎、少子高齢化といった社会現象に阻まれ、思う様に継続できない状況にあることも否めない事実といえる。しかし、後継者不足の理由を社会構造や他に転嫁するだけでは事態の改善にはならないと考えている。

浦浜の昔を辿るといつの時代も有志による小集団で、後継者養成に持続性、親から子への伝承も希薄であったことが、途切れる要因となっていた。

青年層の減少がはじまった昭和50年後半から「我が子を含む子育て」に方針転換。当時の子ども組が社会人となり現在、保存会の中堅を構成し親子三代組が誕生するようになってきた。

基本姿勢(原形)の乱れをどう修正するか、中堅の指導力をどう高めていくかが、今後の課題と言える。

民俗芸能は単調ではあるが、その技は一朝一夕にしてできるものではない。芸能は自分との闘いであり生涯の友、心の友として学び続ける価値、奥深さが有るからこそ観る人々の心を魅了する。民衆の暮らしの中で連綿と受け継がれてきた理由がそこにあると思うし、貴重な文化遺産を次世代に繋いでいくためには、現状把握と創意工夫を探求し続ける自助努力を怠ってはならないと考えている。

▼金津流浦浜獅子躍(三陸港まつり)



▼浦浜民俗芸能伝承館完成



▼浦浜念仏剣舞(東日本大震災犠牲者供養祭)



▼4月9日撮影:合同詰所跡地(向って左側に刀が散乱し、面は裏側道路にありました)



.....
V まとめとして
.....

まとめ 震災5年からの文化復興への提言

特定非営利活動法人いわてアートサポートセンター 理事長 坂田裕一

はじめに

震災から5年。

生活基盤の復興整備が進む中、文化芸術面においても宮古市民文化会館の改修再開、釜石市民文化センターの着工など、文化施設の整備も徐々に進み始めている。しかし、肝心の住民自らの文化活動はどうだろうか。震災支援の鑑賞公演が減少するなか、住民の鑑賞機会はどう変化しているのだろうか。

高齢化と急激な人口減少に伴う後継者不足と指導者不足は、昨年度、当法人が実施した被災地アンケート調査でも深刻な状況であると指摘されている。同時に、子どもの文化芸術体験の必要性を訴える声も少なくなかった。

ここでは、当法人の実践活動の中から新たに気付いたことを中心に、今後の展望を模索してみたい。一年経てばニーズは変わる。ニーズに即応しながらも将来を見据えた活動を以下5つの項目ごとに提言してみたい。

伝える活動＝記憶の表現

平成27年度の「いわて文化支援ネットワーク事業」の主要活動の一つに「あの日から」出版記念朗読劇がある。高橋克彦氏ら岩手出身の12名の作家が、震災からの心の復興を命題にして短編小説を持ち寄り平成27年10月にアンソロジーとして出版した。

「あの日から」の全作品を朗読劇として上演しようという企画は、震災直後に岩手の12名の作家たちが作品を持ちより出版した短編小説集「12の贈物」に続くものだった。本の出版は被災者の支援金集めが目的であり、朗読劇はそのことを広く市民県民に伝えることが目的だった。ほとんどの公演は盛岡で行われた。沿岸での公演も一部実施したが、それは朗読劇を楽しんでもらうためであり内陸と沿岸の交流を主眼とするものだった。

今回の公演は沿岸被災地の4会場で3作品が上演され、その他は盛岡や二戸で行われた。前回との違いは作品自体に震災と向き合った作品が多かったことと、上演後は作家や観客を交えたミニフォーラムやアフタートークを開いたことだ。

被災地のトークでの共通の意見は、朗読劇の公演継続はもちろんだが、もっと内陸各地や全国でも公演して欲しいという声だ。作品のテーマが震災で、震災によって傷ついたり励まされたりした心の動きを追った作品が多かったこともある。被災地の辛い話や勇気を持って立ち上がる話を、被災地以外で行って欲しいという気持ちは、各地で風化されつつある震災の記憶を、忘れて欲しくないという被災地からの悲痛な叫びかもしれない。

震災の記録は、映像や新聞記事などで伝え継承できるだろう。勿論、それすら大変な労力を要する。丹念に取材する報道関係者の辛苦も並大抵ではない。敬意を表したい。

事実に優る話はない。しかし、震災で起きた心の傷や痛手、葛藤などをより深くかつ多面的に「記憶」として刻むために文化芸術の力は不可欠だ。

「あの日から」の作品の一つ、アナウンサーでもある菊池幸見氏の「海辺のカウンター」は、津波で大切な恩師を亡くした男性ライターの鬱屈した気持ちを描いている。男性は内陸部で住んでいる。恩師との約束も果たせぬまま「書けない」自分に自虐的になっていたが、恩師の亡霊と出会うことによって救われる。犠牲者に思いを寄せるといことは、残された者の心にも寄り添うことかもしれない。文学における記憶は、数量的記録では図ることのできない「心のひだ」の奥にも入り込むことが可能である。

文学や演劇などの表現に、震災復興のため何が可能かと問えば、おそらくこうした「心の記憶」を伝え継承していくことに違いない。そしてそれは、いよいよこれからが定番となるだろう。「あの日から」の編集を主導した道又力氏(当法人の監事)は、あとがきの中でこう述べている。

『震災のような非常時において、真っ先に必要なのは、まず食料であり、衣類であり、住まいであり、電気であり、ガソリンである。それは間違いではない。
けれど小説に人の命を救えなくても、人の心は救うことができるかもしれない。
何故ならば、物語には人間の内面の深いところに入り込み、もつれた感情を解きほぐす力があるからだ』

学ぶ活動

指導者不足、後継者不足は深刻である。

震災後のコミュニティ再生に大きく寄与し、被災者の心の拠り所にもなった祭りや民俗芸能も例外ではない。外部からの参加者や資金の支援がなければ、成立困難な祭りも少なくない。

被災地での高齢化と人口流失は、全国のどこより加速していると言ってよいだろう。華道・茶道・書道など暮らしに密着した生活文化から、美術・音楽・演劇といった芸術文化まで、人手不足は進行している。特にも個人レッスンを核とする表現においては、少子化と地域経済の脆弱性も相まって、指導者の生活基盤さえ弱体化させ、被災地において新たに指導者の道を歩むことを困難にしている。

指導者不足・後継者不足は「市場の力」「個人の力」では補いきれない段階に来ている。従来とは違う形での補強が必要だ。

ひとつの民俗芸能の例を述べよう。民俗芸能は地域で伝承される。しかし、その表現力は外部からの評価によって自覚できる。ある芸能は震災以前から後継者不足に悩み、演者の数もほんの数名までに落ち込んでいた。そうした中、地域外で芸能を披露する機会を得た。それまで芸能は門外不出の禁があったという。苦渋の決断で禁を破り外部で芸能を披露すると、その表現は高い評価を得た。そのことが地域の自信につながり、若者や子供たちが積極的に芸能に関わるようになり、現在、参加者は数十人に膨れ上がったとのことである。今では積極的に外部出演もこなし、震災後のコミュニティの団結も保持できているという。従前の殻を打ち破るこ

とも必要であるということだろう。

半面、指導者不足は、井の中の蛙状況に追い込むことがある。複数の指導者や複数の団体が表現力を競い合うことで地域全体の表現力は向上するが、競い合う者がいない場合、ややもすると「守り」の姿勢が強くなり、集団創作の表現においては行き場のない閉塞感すら生み出す恐れがある。指導者は、地域に他の指導者がいない場合、積極的に外部から別の指導者を招き、新たなノウハウを学ぶ勇気を持つ必要がある。

文化会館や公民館のような文化施設においても「学び」は不可欠だ。

当法人で文化会館等の人材育成を目的に「ホールレプショニスト」研修を久慈市と宮古市で行い、ホール関係者や地域の文化関係者が50名近く参加した。言わば文化イベントの受付案内のノウハウを学ぶ研修である。これまで沿岸では一度も行われてきたことはなかったという。受付の服装、挨拶の仕方、客席案内の仕方、障害のある方への対応、イベント内容による案内の仕方の違いなどを学んだ。これはホール職員のみならず、イベントに従事する多くの人が知っていなければならない基礎知識である。

地域の高校生たちは先輩から後輩へとホールでのイベント実践を経験則により継承していく。演劇部や音楽部の生徒たちは、他部のイベントも手伝う。しかし、ホールが被災し数年経つとその経験則すら失われてしまう。宮古高校の校長先生は切実な思いでその現状を語っていた。

ホールは職員だけにノウハウを固めてはならない。ホールのノウハウは地域へ還元しなければならない。そのための学びの場を用意したい。

会館や公民館は発表の場であり学習の場であるが、ややもすると利用施設としての貸スペースの役割に重きを置く場合が少なくない。貸スペースの役割も住民の自主的な発表の場、学びの場を保障するために大切である。同時に、積極的に住民の潜在的な文化ニーズを掘り起こす「学び」の事業を展開させることも必要だ。とりわけ指導者不足、後継者不足を補うための積極的な関与が求められる。

交流する活動

「伝える活動」も「学ぶ活動」も「交流する活動」が推進力になる。

そして、交流には、世代間の交流、地域間の交流、異ジャンルの交流がある。

平成27年8月上旬、演劇活動を行う宮古、二戸、岩泉の子どもたちが、一緒に2泊3日の合宿でワークショップを体験した。震災支援を積極的に展開する「真如苑」の社会貢献事業の助成を受けて実施できた。講師は東京から専門家を招いた。子どもたちにとって貴重な体験だった。

震災以前、内陸部と沿岸部の文化交流は薄かった。主要都市間の移動時間が2時間という距離的難点が交流を疎遠にしていた。震災の支援活動によって交流は飛躍的に深まった。交通網の整備も進んでいる。しかし、距離的時間が短縮できたとしても2時間が1時間半に短縮するだけである。支援活動が縮小しつつある中、交流自体も縮小する恐れがある。

指導者不足も交流の中で補うこともできる。祭り参加者の不足や民俗芸能の出前も同様であ

る。日常の文化交流が文化的な課題の解決の一助となる。

異ジャンルの交流も捨てがたい。大船渡地域で開催されている国際的な芸術祭の仕掛け人はコンテンポラリーダンスのリーダーである。コンテンポラリーダンスと民俗芸能の交流からイベントは生まれた。震災直後、ダンスのグループは「踊りに行こうぜ！」を合言葉に被災地支援に乗り出そうとしていた。私はコンテンポラリーダンスが市民権を得ていない三陸沿岸での「踊り支援」は時期尚早ではないかと助言した。彼らもまたすぐそのことに気付き、合言葉を「習に行こうぜ！」に変えた。土俗的な民俗芸能と現代的なコンテンポラリーダンスの信頼関係はここから生まれ交流が深まった。

しかし、交流の課題も少なくない。距離的時間が短縮できても経費の削減はままならない。交流距離が長ければ長いほど経費はかさむ。次代を担う子どもたちの交流にこそ時間と経費をかけたいところだが、そこに回す余力は県内には乏しい。今後5年も交流経費の支援は欠かすことはできないだろう。財源確保のための啓発理解の活動強化が求められる。

出かける活動

出かける活動は、主に被災地域からの発信と、施設からの出前の活動である。

「伝える活動」にも通じるが、震災からの記憶の発信は、外部の文学者や演劇人に委ねるだけではなく、住民自らが表現活動を外部に発信させることも必要である。震災後、釜石で新しく誕生した「劇団もしょこむ」は表現技法こそまだ拙いが積極的に県内外に発信させ、多くの人々に共感を与えた。震災直後は三陸沿岸に秘蔵されていた優れた民俗芸能が国内外に紹介され多くの人々に感銘を与えたが、今後は、いよいよ演劇や音楽、美術などの現代社会と人の心を写し取る表現の出番である。臆することなく外へ出かけたたい。

そして、そのことが多くの支援を受けてきた被災地からの感謝のメッセージにもなり得るだろう。

当法人は平成28年度事業として、演劇公演「残花 ～1945 さくら隊 園井恵子～」を制作し、東北と東京で公演する。原爆で命を失った岩手出身の女優・園井恵子の夢を、震災で失われた多くの人々の命と夢を結び、岩手発の舞台としたい。身の丈以上の冒険的な事業だが、ここから岩手の魂を発信させたい。

文化会館においても今後は、施設からの「お出かけ」がキーワードとなるだろう。震災などの災害に遭遇したとき、文化会館の役割はどうなるのだろうか。施設が使えなければ役割を果たせないのだろうか。

福島県いわき市の「アリオス」は近代的な大型の文化施設である。震災後は数か月避難所や物資の保管場所としてホールの活用はできなかった。しかしアリオスは震災直後から「アリオスは変わらない」というメッセージを出し続けた。震災前から「お出かけアリオス」という地域へのアーティスト派遣事業を主要事業の一つに位置付けていたからである。アリオスは、地域文化の振興を会館の目的としている。これは、どこの会館も同様である。問題は施設の中での活動に限定するか、施設外にも展開するかである。現在は、全国的にもアウトリーチ活動という形で積極的に外に出る形が推奨され、文化庁などの助成事業もそれを条件にする場合も少なく

ない。

新たな興す参加型活動

岩手は市民参加の演劇が盛んである。自治体や会館が主催するもの、実行委員会が主催するものなど形式が様々だが、地域づくりを目的に、多様な市民が参加できる舞台づくりが、その要件となっている。

県内の会館は、厳しい寒さの冬に、会館利用が極端に減少する。成人式後の1月から、お彼岸前の3月までは一般利用が数回程度という会館も珍しくない。この状況を打破しようと始まったのが、遠野市文化センターの「遠野物語ファンタジー」である。これまで40年以上も行い、その成果は県内全域に広がり北は二戸から南は一関まで、17カ所で市民参加劇が行われている。音楽版の市民参加ともいうべき「第九合唱」も多くの会館で取り組んでいる。

しかし、意外にも市民参加劇は沿岸で少ない。沿岸沿いの会館で実施していたのはわずかに釜石市民文化会館と旧山形村の「おらほーる」だけである。釜石は「釜石市民劇場」という実行委員会が実施主体だが、震災2年後に屋外のイベントテント施設で再開した。「やれない辛さより、やるための苦しさの方がどんなに楽か」とのメッセージは心に響いた。そこには市民劇を通じたコミュニティがあったのだ。2年後、釜石市の会館が新設される。

宮古市民文化会館が再開した。市民参加劇の前に、「第九」の演奏会が行われた。予想を上回る参加者の応募があった。市民参加劇も28年度から準備にかかる。市民参加劇は「第九」以上に、市民各層からの参加者を募ることができる。

市民の参加を得て、新たに興す舞台づくりは、活動を通じたコミュニティの形成にも寄与するだろう。

最後に

5年間の文化支援ネットワークの活動は、被災地の文化的ニーズを掘り起こし、刻々と変化するニーズに対応した支援を可能にしてきた。

次の5年間は、さらにその活動を強化するとともに、被災地自ら発信参加する文化事業をより強力にサポートする。併せて、地域との協働型の新たな事業にも着手したい。

この冊子は岩手県の「復興支援の担い手の運営力強化実践事業」の補助を受けた、
「いわて文化支援ネットワーク事業」で作成しました。

提言書 ～いわて文化支援ネットワークの活動から～
『震災から5年 被災地の文化芸術活動の今後』

平成28年3月

発行 特定非営利活動法人いわてアートサポートセンター

〒020-0878 盛岡市肴町4-20永卯ビル3F

TEL 019-604-9020 FAX 019-604-9021

Eメール kaze@iwate-arts.jp

編集 株式会社reto

